

新たなクロニクル(リ
メイクもとい改造中)

幽鬼桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作者が仮面ライダークロノスが好きなので好きな小説のISと混ぜて出来た作品です

下手くそで更新遅いですが許せる人はどうぞー

目次

プロローグ	1
設定	8
一話	12
二話	17

プロローグ

永「罪を償ってください！」

宝生永夢がそう言うのと檀正宗は笑い始めた

すると倒れていた檀正宗は立ち上がり

正「君達は命の管理者である私に楯突き消滅者の命を復元する手段を放棄したのだ
!!」

と言い仮面ライダークロニクルのガシャットを自分の胸に向けた

永夢達が止めようとするも届かない

そして自分の胸に突き立てようとする何処からか

ポーズ

とゲームのような音が鳴る

そして今までガシャットを突き立てようとしていた檀正宗や永夢達の動きが止まる

そしていつからそこにいたのか仮面ライダークロノスに似た色違いのライダーが檀正宗の前まで歩いてくる

そしてクロニクルガシャットを奪い少し離れると自分の腰についているバグルドラ

イバーツヴァイのA、Bボタンを同時押しすると

リスタート

と音声が届るとさつきまで止まっていた全員が動き出す

檀正宗は自分の手にクロニクルガシャットがないことに気がつき驚き永夢達も同じことに驚く

少し離れた位置にいたライダーはクロニクルガシャットを空に投げガシャコンマグナムを取り出し空のクロニクルガシャットを破壊する

その音でライダーの方向を向いた全員が再び驚く

クロニクルガシャットを破壊された檀正宗はもう一人のクロノスの姿を見て自問自答を繰り返している

その中檀黎斗と花家大我が問う

黎「貴様は誰だあ！答えろお！」

大「答えないなら力づくで…！」

ライダーは答えず変身を解除する

変身者は若い14、5歳の黒い髪の少年だった

全員が再び変身者の素顔に驚く

貴「あれー？知ってる顔じゃないのー」

と戸惑いを隠せない顔で九条貴利矢がそう言い

永夢は信じられないと言うような顔で固まっている

だがそれでも現実を受け止めるために問いを口に出す

永「一夏！どうして君がクロノスに!?!」

そう色違いのクロノスの変身者であり、宝生永夢の義理の弟である宝生一夏に疑問を投げ掛ける

一「兄さん、管理はちゃんとしておいた方がいいよ？前に間違ってCRに入ったときにすべてのガシャットを触れたから全部のバグスターウイルスに感染してみたみたいなんだ」

とクロノスになれた理由を淡々と話し出す

一「そしたら抗体ができてみたいでさ」

永夢達があまりにも危険なことをし、さらにすべてのバグスターウイルスの抗体が出ると言った一夏に驚愕する

一「それが1ヶ月くらい前の話でね、兄さんがしていた仮面ライダークロニクルの話聞いて僕にも出来るかなってそしたら変身出来たんだ」

今でさえ驚きの連続なのにさらに一夏は爆弾を投下した

一「でも僕も檀正宗さんと同じ色のクロノスだったから兄さん達に間違えられて倒さ

れたくなかったし、時間関係のことでやってみたいこともあったからクロニクルガシャツを改造してんだ」

さらにガシャツの改造までしてしまった一夏に全員が目が点になる

だが気になったことがあった為正気に戻り一夏に聞く

大「やりたいことってなんだ」

そう聞かれた一夏は語り始める

一「前、兄さんに言ったよね？僕は異世界人だって」

永「そういえば…言ってたね」

一「僕は考えたんだもしクロノスのリセット能力を僕が跳ばされた空間に使ったら元の世界に繋がるんじゃないかって」

鏡飛彩は気付く

飛「まさか…そのための改造か！」

一「飛彩さん正解だよ」

永「でも一夏は言ってたあっちの世界でいじめられていたって何でそんな世界に戻るうとするんだ!？」

一夏には優秀な兄弟が三人いる一夏はその中の一人と周りの人にいじめられていた

一夏は答える

一「兄さん、俺はこの世界では確かに幸せだよ、でもね時々脳裏に写るんだいじめられていた苦しかったあの頃の記憶がさ、だからあいつらと縁を切るために戻るんだ」

そう決意のこもった目で空を仰ぐ

そして永夢に目を向け

一「それに、助けてくれた人達にありがとうって伝えたいしね。」

そう言い一夏は何処かに行こうとする

永「一夏！」

そう言い一夏を止めようとする

そうしたら一夏が振り向き

一「大丈夫全部終わったら兄さんの所に戻るよ、絶対に僕は兄さんもCRの人達も好きだからね、だけど、少しだけサヨナラするよまたね兄さん」

そしてしばらく走ると一夏は目的地である永夢と最初に出会った場所についた

そしてガシャコンバグヴァイザーツヴァイを腰につけ緑の部分が青になった色違いの仮面ライダークロニクルガシャットのボタンを押す

すると

《仮面ライダークロニクルアナザー》

と音が鳴るそしてAボタンを押しガシャットをバグルドライバーに入れバグルドラ

イバーの左上についているスイッチを入れ変身する

するとクロノスとは少し違った変身音声が鳴り出し一夏の上には青いクロノスのデイスプレイが現れる

《天を指せライダー》

《創れクロニクル》

《今こそ時は動き出す》

音が終わったと同時にデイスプレイが一夏を通過する

するとそこには緑の部分が青く、白のラインがすべて赤くなった仮面ライダークロノスアナザーが現れる

巨大なガシヤットケースを取り出し自分の持つているガシヤットを確認し、そしてガシヤコンバグヴァイザーとガシヤコンバグヴァイザーを取り出し二つともあることを確認する

バグヴァイザーを懐にしまうと予備のクロニクルアナザーガシヤットをバグヴァイザーツヴァイに入れ空に向けBボタンを長押しする

するとその向けた空間が歪みクロノスアナザーの後ろに大きな時計が出現する

時計の針が逆に回転し空間の歪みは酷くなりやがて穴のようなものが現れた

一夏はそれが現れるとBボタンを離しながら穴の中に入っていく

そして一夏の姿が見えなくなりその数秒後にはそこには何もなかったかのように静かな風景があるのみだった

設定

宝生一夏（15）

この小説の主人公。三年前に宝生永夢に倒れていた所を拾われ、そのまま永夢に引き取られた。すべてのバグスターウィルスに感染して抗体を手に入れた凄いやつ。基本ハイパームテキ以外の全てのガシャットをさせる。檀黎斗のガシャットを作っている作業を見たり、ゲームプログラムミングの本を読んだりしてガシャットを作れるようになっていて。CRの人達や檀黎斗からは弟のように思われている。元の世界ではいじめられていた為能力が発揮できなかった。だが永夢の力になりたいため医療を学んでいる。今は応急処置くらいなら出来る。生活能力がそこらの主婦より高い。暇な時はCRの掃除をしていたりする為永夢達からは感謝されている。

仮面ライダークロニクルアナザーガシャット

一夏が元の世界に戻る為に作ったガシャット一応予備が何個かある。ライドプレイヤーにはなれない。

仮面ライダークロノスアナザー

一夏がクロニクルアナザーガシャットとガシャコンバグヴァイザーツヴァイを使っ

て変身するライダー。基本、クロノスと性能や能力は一緒だがリセットが数年前まで戻せるが範囲が決まっていたり武器召喚のスロットに自由にもものをいれたり出来るようになっていて。一夏は武器スロットに着替えやガシヤットをいれている。

専用機 エキサイト

名前はエグゼイドのオープニングから名付けました。ガシヤットを腰のドライバーに入れると形と戦闘スタイルが変わる。(バグルドライバーにすることもできる。)因みにパススロットには共通武器のガシヤコン系の武器の発展系とそれぞれのガシヤット専用武器が入っている。

宝生永夢 (24)

一夏の義兄。基本は原作と変わらないが三年ほど前に倒れていた一夏を拾った行き場がないようだったので家族として迎え入れた。生活能力が低いのでしばしば一夏に叱られたりしていた。

鏡飛彩 (24)

一夏の医療の師匠の一人。基礎から応用まで教えてくれるのでかなりいい先生。たまにはCRの掃除をしると一夏に叱られていたりする。後は原作と変わらない。

花家大我 (29)

一夏の医療の師匠の一人。裏の話までしてくれる人。食べ物の中でも一夏の飯が一

番好きだったりするいい人。後は原作と変わらない。

九条貴利矢（34）

一夏いわく不審者。笑顔が不気味という理由で最初はものすごく警戒されていた。でも根はいい人なのでたまに遊びにつれていってくれたりする。後は原作と変わらない。

檀黎斗（30）

一夏の憧れの人。新檀黎斗と一度あったときに「私は神だアアアアア!!」の自己紹介で気難しい人と思っていた黎斗に面白い人だと思いついてサインとか要求していた。本人はかなり一夏的能力を評価しており自分の助手にしようとしていたりする。

檀正宗（54）

一夏に邪魔されて消滅できていない為警察に捕まっている。「仮面ライダークロニクルは続くのだあ！」とか叫んでいるらしい。

篠ノ之 束（24）

一夏と子供の頃に遊んでいた。本人は一夏のこと好きなのでかなり可愛がっていた。一夏のことを捨てた織斑家はかなり嫌っている。自重を知って欲しいと一夏に切に願われている。

クロエ・クロニクル（18）

殺されそうになっている時に束に拾われた。束によく一夏の話をさせていたので一夏が思っているよりも一夏のことを知っている。結構一夏に好意を持っている。

一話

浮遊感が終わると一夏は目を開ける

そこは自分の生まれた世界の一夏が世界を移動した海辺の倉庫だった

一「さあ戻ってきたがどうしようか」

一夏はノープランだった

一「まあこんなところにいるても何もできないし近場の町に移動するか」

とにかく人のいる場所に移動を開始するのだった

その頃

何処かにあるラボで奇妙な服を着たウサミミを着けた女性がいくつかのディスプレイを見ていた

そのディスプレイの一つからアラートが鳴る

「?」?いつくんが消えた辺りで高エネルギー反応?何このカラフルなボディースーツを着た人は?ふーん、面白そう!くーちゃん!ちよつと行ってくるー!」

そう言い女性はニンジン型ロケットに飛び乗った

一夏はクロノスアナザーの格好のまま町を探し一、二時間迷子になっていた

田舎だよ」

一「ハア、ハア、ここどこだよ、ハア、建物一つ無いなんて、ハア、ハア、どんな歩きっぱなしで限界が近いなか休もうと少し開けた場所に向かう

休む為に変身を解除しようとする上空からニンジンが降ってくる

一夏はポカンとしているとニンジンが開き中から人が出てくる

?「ねえ君、何でそんな格好してるの?素顔を見せてよ」

その人は気の抜けた声でそう聞いてくる

一夏は呆れながら突っ込む

一「何してるんですか、東さん」

東「え?まさかいつくん?」

一「そうですよ東さん」

そう言いながら昔よく遊んでくれた姉のような人に変身を解除し素顔を見せる

すると東は鳴き始め一夏に抱きつく

東「うええくん、よかったよ、ヒック、いつくん生きてた」

一「ちよつ、東さん!」

咄嗟の行動に一夏が驚く

一夏は宥めながら東の問いを答える

何処にいたのか、何があったのか、さっきの姿はなんだったのか等だ

一夏は全てを話した

世界を移動したこと、永夢に出逢い弟になったこと、仮面ライダーのことを話した
東が泣き止んだので次は一夏が何があったのかを問う

東は色々なことを話してくれた

姉がモンドグロツソで優勝したこと、姉と兄と弟が自分を捨てたこと、その事が原因
で織斑家と縁を切ったことを聞き一夏はもうすでに織斑家と縁が切れていたことを
知った。

これからどうしようかと悩んでいると東が

東「ねえねえいっくんとにかく東さんのラボに来ない？もつといっくんと話がした
いしさ」

そう言われとにかく行ってみるかと思えば一緒にニンジン型ロケットに乗るの
だった

約二時間後 東のラボ

東「いっくんようこそ東さんのラボへ」

東のラボは地図に載っていない孤島にあった

東「あ、いっくん待ってて」

そう言いラボの奥に消えていく

数分したら一人の少女を連れて東が戻ってきた

東「紹介するよ、くーちゃん」

ク「東様その紹介では私の名前がわかりません」

そう東に突っ込んだ後に改めて自己紹介をする

ク「始めまして、一夏様ですね。私はクロエ・クロニクルと申します、以後お見知りおきを」

一「ああ、よろしくな」

一夏は返事をする

東「いっくんこっちこっち」

一夏は東に呼ばれラボの奥に入っていく

クロエは後ろをついてくる

東「この部屋に入って」

そう言われ入った部屋にはISが置かれていた

一「東さん何したらいいの」

そう言うが返事が帰って来ない

試しにISに触れてみる

すると光が溢れ目が見えなくなる

光が消えて目を開けると視界が高いことに気付く

一「えっ、ええっ！」

一夏はISを纏っていた

一話

一夏が驚いていると東が入ってきた

東「フフフフ、驚いてるねーいっくん。私が作ったISは設定次第で男だって乗れちゃうのだー」

と言いながらとてもいい顔をしている

東「とにかく一旦降りようか」

東は一夏に降りる方法を伝える

ISから降りた一夏は東に尋ねる

一「なんで僕をISに乗れるようにしたんです？」

東「それはねー、東さんを手伝ってほしいからだよー、それにいっくんの持つてるガシャットとドライバーってやつにも興味あるし、ねえ頼まれてくれない？」

一夏は少し考えて返答を返す

一「いいんですけど一つ条件があります」

東「何ー？東さんに来ることなら何でもするよー？」

一「会社を作りたいんです」

東「いいけどなんで会社なの？お金ならあげるよー？」

一夏はこっちの世界に戻ったらしたいことがあった

一「お金が欲しいわけではないんです。僕は向こうの世界にあつた素晴らしいゲームをこっちにも広めたいんです。そのため会社を作ろうかと」

一夏は幻夢コーポレーションのゲームが大好きだった

どうにかしてこちらの人達にもあの感動を体験して欲しかった
故にゲーム会社を作りたかった

東「うーん、会社かーまあやってみるよそれよりもー」

そう言い一夏を見て目を光らせる

東「あのガシヤットつてやつ貸してー！」

そう言い東は一夏に抱きつく

一「ウワツ、東さん離れて！倒れるからー！」

東「やだねー貸してくれるまで絶対に離れないよー！くーちゃん！そつちから抱きついてー！」

ク「一夏様失礼します」

一「えつ、クロエまで！離れてくれよー！」

この騒ぎは一夏がガシヤットとドライバーを東に貸すまで十数分ほど続いた

一夏がガシヤットを貸した後に束が専用機を作ると言われてもほぼ反応しないほど
一夏は疲れたらしい

因みに余談だが束とクロエの生活能力の低さにビックリし料理と掃除等の家事をクロエに教えていたりする

そして束のラボに住み着いて二週間ほどたった頃束に呼ばれて研究室の一つに入っ
た

そこには変わった形のISがあつた

一「これは……」

束「じゃじゃーん、これがいっくん専用のIS『エキサイト』だよ」

一「エキサイト……どんなISなんです？」

束「それはねーなんと！ガシヤットで戦闘スタイルが変わるISなのだ」

一「？どうゆうことですか？」

束「このタドルクエストのガシヤットを腰のドライバーに入れると近接型のISに、バンバンシューティングのガシヤットを入れると遠距離型のISになるのさ」因みにダブルガシヤットにも対応しているからパーフェクトパズルとかにもなれるからエナジーアイテムも使えるよ、あ、ドライバーを変えたらデンジャラスゾンビや仮面ライダークロニクルも使えるからね」

一夏は頭痛が痛かった

確かに自分の専用機を作ると言っていたがこんな常識はずれのものを作るとは思っていないからだ

一「東さん：貴方限度と言うものを知っていますか？」

東「知ってるよ～しなだけだよ～する気はさらさらないけどね」

一「まさか：それぞれのガシャットの能力まで再現しましたか？」

東「それは流石に出来なかつたんだよ～いやあ～これを作った人は天才だねえ」

一「まああの人が作ったものですから」

東「それはさておき乗ってみてよ～微調整とかあるからさ」

東は一夏をエキサイトに乗せるとコンソールで微調整を始めた

一「そう言えば東さん会社の件どうなりました？」

東「もう少しかかりそう～1ヶ月ほど貰ってもいい？」

一「僕はいつでもいいですよ、ゲームのカセットにしなければいけないですから」

一夏の幻夢コーポレーションのゲームを広める計画は徐々に進んでいた

その頃

？「あの少年が出来たのだ、神である私が出来ないわけがなア！」

何処かの神を名乗っている男が一夏の世界にいくガシャットを作っていた

？「待っている少年！君の信じるこのかアみがア、世界を繋げて見せるぞオ！」
∴かなりおかしなテンションで